

みなさん、お元気ですか。昔の名前で出ています。

— 関西ブントからネグリへ？ —

元共産主義者同盟烽火派 八木沢二郎 Yagisawa Jiro

元共産主義者同盟 (RG) 榎原均 Ebara Hirosi

元京都大学同学会中央執行委員長 市田良彦 Ichida Yoshitiko

司会 表三郎 Omote Saburo

1

表 まずは関西ブントの総括を八木沢さんと榎原さんにしていただき、その次に後の世代である市田さんに京大同学会運動を担ってきた立場から先輩たちの運動がどう見えたか？ どのような問題があるのか？ ということを話していただき、そこからネグリ評価につなげていきたいと思えます。では八木沢さんからお願ひします。

八木沢 ブントの総括と言ったら大げさになりますが、これまでの運動を振り返ってみたいと思えます。

一九五六年のフルシチョフによるスターリン批判から日本の新左翼運動は開始され、五八年に日本共産党の学生細胞から分裂する形で結成されたというのがご承知のとおりです。学生運動という限られた枠ではありましたが、単にスターリン批判に影響を受

けたということだけではなく、現実的にそれを進展させるために第一次ブントが結成されました。砂川闘争や原水爆反対運動などを経て六〇年安保に到るのですが、そのときのブントの結集点、ある意味で綱領的立場と言っていると思えますが、それは大きく言えば三つに集約される。

一つは世界同時革命を復権したこと。当時のフルシチョフの平和共存路線をたどればスターリンによる一国社会主義論から来ている、という認識のもとで世界同時革命が主張された。二つ目は一段階社会主義革命です。これは直接的には当時日本帝国主義復活論争などで唱えられたコミンテルン型の民族綱領の二段階戦略に対して主張されたものです。三つ目は前者二つの帰結でもありますが、議会主義あるいはトリアッティの構造改革路線に対する暴力革命・プロレタリアート独裁を主張したこと。この三つが第一次ブントの結集点、綱領的立場です。こうしたことは、第一次ブントの成果であるし、現代でもわれわれが踏まえなければ

ばならない地平であると思っております。

ところが六〇年安保闘争の終焉と同時に第一次ブントは解体し、その一部は革共同に行き、関西であれば、われわれが第一次ブントを継承する形で関西ブントを結成した。そのときわれわれは、なぜ第一次ブントは解体したのかを考えた。様々な要因があると思えますが、一つは思想の雑居性があげられる。トロツキズム、主体性唯物論、宇野経済学がブントの三つの源泉であると言われていますが、吉本隆明や谷川雁も含めて、思想的な統一性を持てなかつたことが弱点になった。そしてブントは依拠する運動のほとんどが学生運動であったために、その運動の狭さが二つ目の弱点としてあった。そして、組織論上の戦術主義が三つ目の大きな弱点としてある。トロツキーあるいはローザの自然成長的な階級闘争観・党観であり、いわば、階級意識というのは戦術という形態をとらなければならぬという考え方です。そのような戦術的な見解によって組織が分裂するところに三つ目の弱点があった。

思想的雑居性に関して言うと、榎原さんの宇野経済学批判は現代における踏まえるべき地平だと思えますが、だからといって宇野経済学をよしとする考えをブントから排除することにはならない。例えば、レーニンとブハーリンの国家トラストという資本主義観は明らかに違いますが、ボルシェヴィキという党の中で同居している。したがって個々の考えの違いが党を別にすることにはつながらない。むしろ、党の分裂は政治的な潮流によって分裂するのであって、理論上の違いは直ちに党の分裂につながるのでは

ない。だから、第一次ブント解体の問題では、党に対する考え方があったのではないかと思えます。

第二次ブントは第一次ブントを継承しているのですが、綱領的立場としては、先ほどの世界同時革命・一段階社会主義革命・プロレタリアート独裁を継承しているのですが、さらに別の事柄が加わる。第二次ブントには、あとで議論するネグリの問題とも絡みますが、一九六八年同時革命と言われるような時代状況、ベトナム反戦運動から七〇年安保に至るプロセスの中で突きつけられた「第三世界」に対する対応、民族解放闘争の問題が自らの立場をいやおうなく表明せざるを得なくなった。そのとき毛沢東路線の周辺革命に反対して、一言で言えばプロレタリア世界革命の一端としての民族解放闘争という立場を掲げ、様々な内容の違いがあります。「過渡期世界論」というところに自らの立場を置いた。時代的要請も含めて、先ほどの三つに新しい立場を加えたところが第二次ブントの結集点、綱領的立場になっている。後ほど議論するネグリの提唱するグローバル資本主義にどういう立場をとるかということと関係してくると思えますが、第二次ブントでは過渡期世界論が綱領的立場として主張されました。

しかし、第一次ブントと同じで、戦術主義の弱点は克服されることなく、思想的雑居性や、党内闘争をやれるような党観の欠陥などが最大の弱点として残ってしまった。とはいえ、弱点は同時に長所でもあるところがあり、黒田寛一に象徴されるような革共同主義、つまり党を絶対化する「永遠の今」論のようなもの、あ

るいは『資本論』に至らない初期マルクスを絶対化することに對しては、党を階級闘争との弁証法関係の中で考えるということ、ブントの持つ長所となっている。

このようなブントの持つ綱領的地平を踏まえた上で、われわれはどういう組織を、階級闘争をつくっていくのかということが現代の課題だと思っています。それについては後ほどネグリについての議論でなされると思いますので、そちらに譲ります。

表 ありがとうございました。次に榎原均さんに、特に二・一八ブント（後出）を軸にしてお話しいただきたいと思ひます。

榎原 六七年一〇・八（佐藤首相ベトナム来訪阻止の羽田闘争）から話さないと理解されないと思ひますので、そのあたりから始めたいと思ひます。一〇・八前後は労働者を組織する部署にいました。先ほど八木沢さんからお話がありました、六〇年安保当時の運動は労働者の運動ではなく学生運動でしかなかったということで、労働者を獲得しようということになっていたのです。それで学生運動体験者が官公労や民間の労働組合の書記になったりして散らばっていった。当時の関西ブントには労働者党員は大阪中電の前田さんとか数人しかいなかった中で、いかに労働戦線をつくれるかということで活動していた。そのように耕す活動をずっとやっていたのですが、「五年かけてやっと一人獲得できる」といった状態でした。それが突然変わったのが、一〇・八だったのです。

一〇・八で山崎君（闘争に参加した京大生）が亡くなったことを背景にして大衆運動が起こりました。それまで労働者は「こちらの方が起こりました。当時関西地方委員会が坂部君が赤軍派を代表して僕たちと議論した。それは非常に民主的な議論だったのですが、一カ月ぐらい続けました。その後RG建設（ローテ・ゲバルト）「赤い暴力」…同盟直属の軍事部隊とされた）に入っていくわけです。RG建設の前に九回大会があり、基本的に「軍事を組織する党」を正面から掲げた決定をし、それをもとにしてRG建設ということになっていったのです。

ところが、RGをつくったとたんに、この党では維持できないという問題に突き当たってしまいました。「岡田論文」（共産主義者同盟（RG）編集『RG資料集』を参照）に書かれていることですが、何人かRG志望の有志を募り共同生活をするのですが、その活動は今までの党の路線から位置づけることはできないというジレンマが出てきてしまったのです。軍事組織を維持していくためにはどういう党が必要なのかということ、**「党の革命」**という話になっていきました。

基本的にはそれまでのブントは合法的な党です。地下組織ではありませんでした。職業革命家の党をめざしていたけども、そうなるほどしきありません。ところがRG組織をつくったら、もちろんまったくお金がなかったら働けなければいけません、RG構成員の生活を基本的に党の財政でまかなわなければいけません。そして党そのものも非合法でなければ連絡もできなくなる。そういうところで「党の革命」という議論が起こったのです。

それと同時に綱領論争が起こりました。ブントの第三次綱領草

がピラをまきにく対象」だったのが、今度は労働者自身が勝手にピラをまき始めるということが起こったのです。それが反戦青年委員会の運動でした。その後佐世保のエンブラ闘争があり、押せ押せのムードの中で僕らは三桁の労働者を獲得しました。そのような経過をたどりながらも、しかし六〇年代末の様々な闘争の中で決定的なところで機動隊の壁にゲバ棒で武装したデモが打ち破られていくということが何回か続きました。これを突破していかないことには大衆運動は実らないということで、これは先ほど八木沢さんが言った急進主義ですけど、結局ゲバ棒で機動隊と正面対決しているようではどうしようもないということで、軍事組織をつくって機動隊の壁を打ち破っていかなければならぬというところに着詰まっていたわけですね。

そのときのいちばん最初の会議のときに一向（塩見孝也氏のペンネーム）君も出てきていて軍事組織を作るという確認を一緒にやったのですが、ところが彼は「軍を公募する」ということで運動を始めたのです。それに対して僕らは「それはおかしいのではない、党的なヘゲモニーなしで軍を先につくるのは基本的には冒険主義である」ということで反対し、関西地方委員会で党内討議をしている最中に、東京で一向君たちが七・六事件（赤軍派がブント中央委員会を襲撃、「赤軍」として組織を離脱することになった。このゲバルトによる怪我がもとで赤軍派の望月上史氏が死亡）を引き起こしたのです。

表 六九年ですね。

榎原 そうです。そのあと関西地方委員会では赤軍派と反赤軍派案というものがあつた、その後九回大会の後に田原芳（故人。関西ブントの中島鎮夫のペンネーム）が綱領草案を出していたのですが、しかしそういうレベルではどうしようもないのではないかとことになった。大衆運動を組織するための綱領でしかなく、共産主義社会はどのようなものであるのかということまで議論していかないことには非合法党も軍も、両方ともつけれないということが議論されるようになった流れの中で、宇野経済学批判を媒介にして資本主義批判が出てきました。要は将来社会のイメージを空想的社会主義者のように描くのではなく、今の実践と密着したかたちでそれを考えると資本主義批判になるといふことです。その一定の結論の中で二・一八ブントの結集点ができていったのです。

他方で九回大会以降の武装闘争が、成功裏には進まなかったという現実がありました。また九回大会に結集したブント各派は、七・六事件に対する批判を軸にしたアンチ赤軍派連合であつて、軍事組織を作ることに対する疑問を提起する分派もありました。分派闘争が再燃する中で、戦旗派とか叛旗派とか情況派とかいろいろある中で、神奈川左派と東北地方委員会と関西ブントのRG派とで二・一八ブントを結成したのです。しかし、つくった後すぐに分解していきます。分解したときの総括として僕らは「党の蜂起」を提起したのです。これはもともとキューバ革命において初期に蜂起があり、それから始まっていくという歴史的な経験を踏まえて、「軍事組織をつくりました、軍隊さん戦争をやった下さい」という具合にはいかなないのであり、党の政治局からまず

は戦闘を起こしていかなければいけないという考えからきています。それで「R G II 政治軍隊」「政治局 II 軍事委員会」という組織的位置づけをやり、戦闘を準備し、大したことはやっていませんが、最初の戦闘をやった。あと、第一インターナショナルの規約にある「経済的隷属」という問題を綱領の原則的部分の内容にするという形で、非合法党の立脚点をつくっていきました。

そのときはもちろん連合赤軍も武装闘争をやっていたし、革命左派もやっていたし、「やろう」としていたところはやっていました。ところが、東アジア反日武装戦線が登場して、彼らは彼らなりの戦術をとり、反日という立場から「日本人民なんて殺戮しても構わない」という論理を持って、三菱重工爆破事件のような無差別殺人事件を起こしました。あれから雰囲気ガラッと変わってききましたね。それまでは基本的に、何だかんだと言っても支持がありました。僕らのところにもカンパが集まっていたのですが、その頃からどんどん潮が引くように支持者が減っていった。そういう中でしんどい思いをしていました。

そのとき、率直に言って、みんな病気になるんですよ（笑）。無理であることは経験的にわかるのだけど、でも一旦始めたことに関しては、確かに敗北したことはわかるのだけど、敗北したことに関してきっちり総括しないことには次に移れないということがあるので、総括できるまでは今の路線でがんばることにならざるを得なかった。それでみんな病気になるながら、最後の武装闘争の機会をうかがうという形ではばらく活動を続けていました。それが七六年ぐらいだと思いますが、その頃からばちばち総括

それは価値形態論をどう考えるかというところに結びついていきます。商品から貨幣が生成していくときに、どういう現実があるのか？ マルクスは何を言っていたのか？ ということがやるとわかるようになったのです。それは商品所有者の無意識のうちで本能的な共同行為が貨幣をつくるということです。無意識のうちで行っている中身は、要は自分の商品を貨幣商品 II 金で表示するということですから、結局市場に売り出すということです。この市場に売り出すという行為が反面として貨幣を形成している。ですから貨幣は日々つくり直されているのであり、マルクスが本場に言いたかったことはこのことではないかと考えたのです。

そうすると、本能的につくっているものを国家の法律などの意志行為で何とかしようとしても無理でしょう。もちろん、国家権力を取ることがおかしいとは言いませんが、それが、それで社会革命ができるかと言えば、そうではない。商品や貨幣を迂回してなくしていくことを当然考えた上で社会革命を構想していかなければなりません。そういうことがやられていないのではありませんか。そういう迂回コースをどうつくっていくのかというのが現在の課題となっています。そこから新しい社会革命の基本的な方向性ということ、「資本のもとに働かずに働かぬ」ということを言い始めました。

資本主義を廃止するための方法としては、ロシア革命でやったように国家権力を樹立してプロ独の力で資本家階級の生産手段の独占をなくするという方法もありますが、要はトヨタが工場の門を

をして、別の新しい形で展開しなければいけないと議論し始めるようになったときに、みんなバクられてしまった（笑）。全員完全ならばかつこいなあと思ったのですが、そうはならず、それまでの苦しかった経過があるから結構みんな自供させられてしまった。それでも僕らは一応非合法の党活動を確立していたので、バクられても党活動は継続できました。もちろん手紙は全部検閲されていましたが、ちゃんと党内論争を組織して、何とか総括をして、党活動の転換という形で「新しい問題提起」をしました。

『情況』（一九九四年四月号）に掲載されている「七〇年の総括と新しい社会運動の展望——二世紀の社会運動の綱領獲得にむけて」を参照していただきたいのですが、この間の経験でわかったことは、一つは軍隊を組織したら、どんな小さな軍隊であってもミニ国家になるということであり、党を組織する組織論ではなくて、国家を統治する政治が問われるのだということです。もう一つはプロ独の国家を統治する政治とは何かを考えたときに、ソ連にしても中国にしてもはつきりしておらず、レーニンが亡くなる直前に遺書という形で「文化革命」を提起しているのですが、これに注目しなければならぬ。中国やソ連のように一旦労働者国家ができたときには、権力関係は世界的に変化しているわけですから、プロ独でもないほかの諸国でも文化革命ができるのではないかということですね。

そして八八年頃になると、ソ連の社会主義建設がなげうまくいかなないかということがある程度わかるようになってきました。開けても誰も行かなければ資本主義は成立しません。一時的なストライキではなく、そういうことが長期的に持続可能なようにすることを考えたときに、労働者がトヨタに働かなくなっても食える状態があれば実現できる。そのようなイメージで語られるようなことが、今問われているのではないのでしょうか。そんな状態をすぐにつくり出すことはできませんが、それを実現する布陣をどうつくっていくかという形で、プロ独でもないので文化革命ができるということを考えているのです。九〇年代の初めまではそんなことは考えていなかったのですが、ソ連崩壊という現実を踏まえた上でのまったく新しいイメージでの協同組合主義を提案したいと思っています。

表 八木沢さんと榎原さんにお話しいただきましたが、それでは次にお二人に対して市田さんから、いろいろと疑問なり提案なりがおありだと思います。よろしく願います。

市田 僕は七六年に大学に入学し、七〇年代の後半、八〇年ぐらゐまで学生運動の活動家をしていました。京大の全学自治会である同学生会で活動していたのですが、京大同学生会はお二人の流れをそのまま受け継ぐ政治的傾向を持っており、お二人がお話しされたことは歴史としてはだいたい知っているし、運動のなかで意識的に受け継がれていました。具体的には、活動家としてまず最初に勉強するのが、六〇年安保闘争の関西プントの総括である「政治過程論」だった。そして基本的世界認識としては「過渡期世界論」がある。こういう言い方が適切かどうかわかりませんが、その二つが綱領的なものであり、その枠組みのもとで運動

をしていました。

ただし、現役の活動家だった頃、実践の中でだんだん僕の中で強く意識されてきたことがあります。それは「党的な指導とは何か？」ということ。簡単に言えば、党的指導とは「影で操る」ことなのか？ 非合法的な共産党の時代の党と労働組合のアナロジで、今日における党的組織と自分たちのやっている大衆運動との関係をつくれるのか？ 考えてよいのか？ 考えるべきだという活動家もいて、戦前の共産党の勉強をしたりしている。けれど僕は、言ってみれば、党は姿を隠し弾圧から身を守りつつ公然活動家に指令するような存在でいいのか、と思っていました。当時こうした考えが破綻していたことははっきりしているように見えた。非合法党、秘密組織、運動の頭脳としての組織は明確に破綻していたと思います。少なくとも僕自身は。

しかし「指導」がなんら必要なのではなく、正しい「指導」とは影で操ることではなく、むしろ自分で大衆の中に出ていき、運動をつくり出すために「政治的な分岐」を生むことであると考えていました。当時は竹本処分紛争闘争をやっていました。これに賛成するのか反対するのかを自分たちの行動でもって突きつける。分かりやすい話ですよ。「私たちは処分に反対しているので授業を潰します、さてあなたはどうしますか？」と態度決定を迫る。大学という制度的に設定された場所の中で、その場所そのものを闘争の舞台に変える、あるいはそのイニシアチブを取ることが「指導」であるだろう、ということ。当時よく言っていました、「日常生活空間の場を非日常的なものに変

「政治」、それに利用されているのではないかという意識が、竹本処分紛争闘争が一定負けた時点で強くあつたわけです。だから、ああいう傾向の人たちとはもういっしょにやりませんよ、と絶縁宣言みたいなもの（腐敗分子白樺派を追放せよ）というようなね）を出しました。出したのは僕よりも前の同学会指導部ですが。もちろん高瀬さんのやっていたことは一面的に捉えることができるものではなく、今日的な言い方をすればサブカルチャー運動の先駆者というところもあつたわけで、あの人たちが西部講堂の「文化」を作り、担ってきたのは事実だし、肯定的に評価されるべきだと思います。イベント組織それ自体が運動であるという考えはいいのですが、あの人はそれも影で操る式でやろうとした。政治でも文化でも、運動に裏の核をつくって、それが表の運動を指導しようとする。そのときの兵隊が赤ヘルをかぶっている現役の学生である僕たちだった。

だから、イベントを影で操ることも党をつくることも良くないことではないかというのが僕たちの結集軸になった。したがって当時の赤ヘル同学会の指導理念とは「自分が表に出ていくこと、陰には隠れない、指導部は最も目立つ存在であるべきである」ということです。とはいえ当時はそんなに人数がいるわけではなく、よく「同学会はお前だけやる」「一人同学会や」と言われていました（笑）。そういうことを指導理念にして、たとえ上の世代と縁が切れても、竹本処分紛争闘争の終わった後に全国から一〇〇〇近い人間を集めるくらいまではいけましたし、それぐらいはできるという自信もありました。

える。そのイニシアチブを握る」です。僕にとっては何よりもこれが政治過程論から受け継いだ路線でした。

八木沢さんは関西ブントの総括として、戦術的急進主義が弱点であったとしていましたが、むしろ僕たちは当時その「戦術」概念を積極的に評価していました。関西ブントは「党による指導」ということについて、まさにこの「戦術」概念によって路線転換をしたのではなかったのかと考えていたのです。それを「革命は単に戦術の問題に過ぎない」と考えたところに、その後の超主観主義的な傾向、つまり革命を武装蜂起の技術的問題に切り縮めるような傾向が生まれてきたのではないのでしょうか。そして技術的な問題に縮減されてしまうと、再び「影で操る」式の指導理念がどうしても出てくるんじゃないか。

影で操る式の指導理念に反対していたのには、もう一つ非常に具体的な問題がかかわっています。竹本処分紛争闘争（経済学部助手であった「滝田修」（本名：竹本信弘）の免職処分反対闘争）がなぜ敗北したのかというと、お二方には異論があるかとは思いますが、結局僕らからすれば上の世代の活動家に裏切られたから、影で操られたからである、という意識がものすごく強かった。固有名詞を上げれば、高瀬泰司（故人。元京都府学連委員長で当時スナック「白樺」マスター。その後、著述業も）さんに一面では指導を仰ぎつつ、甘えつつ（笑）、いっしょにやっていたのですが、ある時期から、彼らの言っていたことを信じたがために運動が変なところに持っていかれそうになった。当時彼らが彼らなりの政治状況把握の中で目指していたもの、僕らには関係のない次元の

当時マル青同の創設にかかわった人たちが京大に戻ってきていて、彼らといっしょに運動していたこともあるのですが、マル青同には「クラス入りのやり方」みたいな実践マニュアルがあり、とても役に立ちました。その後マル青同という学生服にヘルメットをかぶった滑稽な人たちというイメージ、あるいは岡大で殺人事件を起こしたトンデモ集団というイメージが定着しましたが、僕たちは彼らのマニュアルを日常的に使っていました。レーニン研時代の佐野茂樹さん（二次ブントの活動家で京大C戦線の創設者）の文章とかも。赤軍の前段階武装蜂起路線もこの考え方の延長線上で評価していたわけです。あくまで運動を「起こす」ための武装カンパニアであって、クーデタではない。クラス入りもバリストも一種の前段階武装蜂起。ほとんどドンキホーテ路線ですな。たとえドンキホーテ的な決起であっても社会のなかで役割が決定されているはずの場、権力装置そのものである場に、ある種の「揺らぎ」を持ち込むことができれば、それで良いではないかと。それからグラムシの陣地戦論もそこに援用してた。労働運動ではなく学生運動をやることの意味を、「陣地」の概念で説明し、正当化していたわけです。党的な指導の実質とはドンキホーテ的なものにほかならないと考えたり、実際に言ったりもしました。社会のなかには大学とか様々な生活の場が現実的なものとして存在しているけれど、その「現実」が吉本隆明的に言えば「共同幻想」であるということを暴く契機に、自分たちの局所的にドンキホーテ的な決起がなれば良いだろう、「現実」と「幻想」の逆転の連鎖反応が起きれば万々歳。もし「指導」というものが

あるとすれば、それをすることが何よりも「指導」であろう、と。現実と幻想がひっくり返れば、ドンキホーテもほんとうの英雄だ！です。

七〇年代半ばから後半にかけてのブントの綱領論争の余波はわれわれにも及んでおり、僕はそのような綱領論争を通じた党建設には反対の立場をとっていた。実際にあつたことですが、すでにいくつにも分裂していたブント系諸派は、人をオルグして捕まえるとよく運動現場から引かせるのです。僕には大衆運動から切り離されたところで党を維持しているようにしか見えなかつた。大衆運動に積極的だつたのは、構改派系の労働者党やプロ青同や、その後名称を変更しましたが、日本学生戦線とかでした。純粹中国派になりつつあつた日学戦はその後すぐに綱領問題を優先するようになり、北方領土問題を「反社帝」の踏み絵に差し出してくるようになりましたが、まず綱領的の一致があつて、その一致をもとにして党的組織をつくるという考えには、とにかく反対してました。それがはつきり現れたのが、七九年に東大闘争十周年の全国集会を行ったときです。そのときは同学会と同志社の学友会（全学自治会）、それから東大の学友会（文学部自治会）が呼びかけて、全国規模で当時残つていた新左翼系の学生運動を集めてやつたのですが、その舞台裏であつたのが、学生戦線の統一をどうするのかという路線問題であり、それこそ日学戦（京大にもそれ以外の大学にもいた）は綱領論争を仕掛けてできるだけたくさんの学生を引っっこ抜いていきたいと思つてたようです。僕はしかし、それに断固逆らつた。綱領論争なんて今やつてもしょうがないと

僕はもともと甲南大学で活動していましたが、学校運営だった食堂を生協にしようという運動を大管法と絡めながら開始して、兵庫県学連の再建まで引っ張っていくという経験も中核派に入る前に持っています。したがって中核派をやめるときも別に脱落したという気持ちは全然なかつた。

その後大阪市大の大学院に入り、宇野弘蔵批判の研究会を組織してました。大阪市大は左派は多いのですが運動は後進的でした。したがって全共闘に火がつくのは六九年の一月でした。突然封鎖し始めて、僕たち大学院生はそれに対してどのような態度を取るのかだいぶもめました。そこで大学という空間を解放するのが大学占拠闘争であるという位置づけをやつて、当時大流行りだつた最首さんの「自己否定」という問題提起も受けながら、運動を展開してました。

しかし、僕はたちまちのうちに運動の最前線に立つてしまつた。その中で中核派の幹部の人が僕のところへ会いに来て「あいつらめっちゃめちゃやつていけるけども、全共闘とはいつたい何だ？」と聞いてきました。その一方で弟さんが東大の全共闘をやつていた僕の同年代の人が来て「これからは表さんの時代だよ」と言つてきた。そのとき僕は「党は終わったことを認めるのか？」と聞いた。すると彼はすつきりと「党は終わった」と答えました。その後「前進」は「大学を革命の砦に」と書いたのですが、滑稽に見えた。

それで僕は年齢がいちばん上だつたがために院闘の議長になられた。するとブント系などいろいろなところからいろいろな注

か、ベトナムーカンボジア問題みたいなものでなんで採めなあかんねんとか、公然と言つてましたので、彼らみたいに真面目に党を志向していた人たちからはほろかすに言われてましたね。有形無形なデマみたいなものを含めて、めっちゃくちゃに言われてました。基本的に「単細胞肉体派」ですよ。

とにかく「指導とは何か？」ということが当時は実践的に非常に大きな問題になっており、あくまでもその延長線上に僕のイタリア・アウトノミアとかネグリなどに対する今の関心もあるんですよ。僕自身は八木沢さんや榎原さんと同世代なのですが、大学浪人し大学院にも行つてたということでも六〇年代全体の学生運動に関わるようになってしまいました。しかも、日韓闘争のときに中核派に誘われ中核派に入つたので、党的なものとの関係についてはすいぶん悩み、考えてきました。中核派の中央は日韓闘争にそれほど取り組めなかつたにもかかわらず、「勝利」という総括をした。僕はそのときに、こんなふうであるなら、かつての共産党とほとんど変わらないではないかと思ひ、中核派をやめていく。やめる直接的な原因は、八木沢さんがおっしゃつたように、思想的雑居性を何とかしたいというものでした。宇野弘蔵と対馬忠行などの何人かの理論家を並べて、そこから学べという水準でした。六四、五年頃そろそろベトナム反戦運動が始まりかけていましたから、その総括を考えると、結局は権力の本質を考えざるを得ない。したがって大学院のテーマも国家論だつた。それをやつていけるうちに中核派離脱ということになりました。

文が入ってくる。党的なものが全共闘運動に食い込んできて、一本釣りするということは当初から存在しました。

しかし、僕自身は運動をやつていける中で全共闘の意義をストリートにはつかんでいかなかった。今でも鮮明に覚えているのは、大学を占拠すると、僕より十歳くらい若い学生たちが研究室に相合傘を書いて生活を始めた。このとき僕は世代の違いをつくづく思ひ知らされました。その後神津陽さんの『蒼茫の叛旗』などいろいろ読み、だんだん位置づけができてきました。学生運動ではありますが、その大衆運動が党的なものを越えてしまつたという実感をだんだん得るようになってきました。

そして後にフーコーなどをはじめとして構造主義・ポスト構造主義の思想が日本に次第に入つてきた。その中で六八年の意味がだんだん分かつてきた。現在でも絳秀実さんをはじめとして六八年の総括がたくさん出ていますが、しかし立場によって総括の仕方がまったく違つてしまふ。それらを読んで僕が違和感を持つところが多々出てきてしまふ。まだまだ、ネグリの議論などを入れて、一つの歴史的な流れとして総括する必要があるのではないかと考えています。

では、市田さんの問題提起に対して八木沢さんからお願ひします。

2

八木沢 市田さんの時代には同学会の指導部はどういう形だつた

のですか？ われわれの時代は、共産党であれブントであれ中核派であれ、党が前提にあつて学生運動があるということになっていた。

市田 公的組織としての同学会（実質的には各学部の闘争委員会の連合体ですが）以外に数人の指導部をつくっていました。はつきりした名称はなく、「指導部」あるいは「中執」です。年々に「次は誰が核となってやるのか」をその時の指導部が中心になって決めてました。形式的には代議員大会で決めるのですが、それはシャンシャン。指導部選出過程の曖昧さにはよくない面もあって、指導体制のフレキシブルな継承関係を通して上の世代に頼るのです。普通の活動家は上の世代の人間とは接触しない。そしてその指導部が党的なものであるという自覚はありました。実際それは公然組織ではないわけです、普通の学生は誰が同学会のトップかなんて、そのトップが逮捕されるか民青のビラに書かれるまで、ほとんど知らないわけです。ただ、指導部が指令を与えて、頭脳だけを働かせていけばいいとは思ってはおらず、指導部こそがいちばん働かなければいけないと思っていた。そしてたいてい逮捕者も指導部から出る。

八木沢 緩やかであれそういう指導部があり、他方で他の諸党派あるのですが、そういう諸党派グループと自分たちを分ける、大げさに言えば綱領的な集軸、政治的立場は何だったのですか？市田 そこはほとんど二次ブントそのままです。政治過程論と過渡期世界論、特に過渡期世界論です。「プロレタリア国際主義と組織された暴力」なんて何回ビラに書いたことか。独自性みたいな

する」とかは言いますが、フラクションをつくって介入したりしようとはしていなかった。

市田 ただ、現場では党への志向性が強くなればなるほど、「ここで跳ねるな」ということになる。権力の要らぬ介入を招くようなことはするな、となるわけです。組織を守るためにね。昨日まで公然と人を殴りまくってた人間が、真面目に党を考えるようになった瞬間、そういうことはよくない、やるならゲリラ的に、とか。

榎原 そういうことを言う党は、たぶん非法党ではないでしょうね（笑）。なぜなら、日本で党をつくって活動をする場合、武装闘争を遂行すること以外は完全な合法的な活動ですからね。合法的にやれるのに非法だと思ってるにすぎない。

表 ただ、実際上はお友達的なつながりだけでも、党の人は自分の振舞として勝手にフラクションになってしまふ。それで結果的に現場の人たちを「指導」してしまふ。そういうことはあると思ふ。

八木沢 それはわかる。

表 榎原さんが言ったように、党が合法的なものになっていくにつれて、市民社会に出ている部分はフラクションになってしまふ。

榎原 それはそうでしょうね。当時、別に高瀬さんと連絡していたわけでもないし。八木俊樹君（故人。当時は「京都大学卒業生名簿編集委員会」、後に京都大学学術出版会を再建。同学会からは白樺派と規定）とは連絡していましたが、それは本を出す話をしていた

なものがあるとすれば、当時最も大きな問題だったのは三里塚でしたから、三里塚に関わるようになると世界革命だけでは話がすまないようになってきた。農民が生活している現場とかかわる中で、赤ヘルの中からもエコロジカルな傾向の人間が出てくる。権力闘争と生活の質を変える運動の一体化、あるいは権力闘争と文化革命の一体化というのが新しい軸として出ていきました。後にそこから生協運動、産直（産地直送）運動に行く人たちも出てくるのですが、僕はそっちに完全に行ってしまうことにも反対で、それは権力問題をないがしろにすることである、と言っていた。だから危うい均衡の上にあった。一方で、大学の中で二重権力構造をつくり出すことが第一の使命であるという、権力闘争至上主義があり、他方で生活の質そのものをつくり直すにはどうすればいいのかという問いがあった。結局答えがないまま、危うい綱渡りをしていった感じですよ。

榎原 市田さんの活動されていた当時には「党とは非法のものである」という観念が一般的な活動家にはあったというのを聞いてびっくりしました。その「非法党」とは影で操るというイメージのようですが、僕らにはそういう観念はなかった。武装闘争をやるということになって軍隊をつくり、「党の革命」をやって、そして党は非法なものではなくていけないと考えていたというよりも、実際そうなるようになってしまった。そして地下に潜ったとき、僕は大量運動を指導しようなどとはこれっぽっちも考えてはいなかったですよ。僕の持論としては、大量運動は勝手に起こるのであり、起こったことに対して「これは素晴らしい闘いで断固支持

だけだし（笑）、竹本処分闘争をどうするかなんて話していません。

表 僕が知っている限りでは、八木は竹本の支援金を集めていましたしね。そういうことをやっていたから、市田さんにそのような印象を与えるようなことをやっていたと思いますよ。

榎原 非法党ができるような時代になったときに、中間部分がそことの関係を持ちながら「指令」するという形になっているわけですね。

表 そういうことです。自然発生的にフラク活動が出てきた。

市田 それこそ榎原さんが総括文章で書かれていたように、「今日、自然発生的な大量運動の多くは、最大限綱領のレベルで自己を組織している。それゆえ、最大限綱領のレベルの要求で大量運動を組織することを土台にした新たな政治が問われている」。まさにこういう感じだったのです。最大限綱領ぐらゐのものがなければ大量運動さえできない。けれども最大限綱領でもって党をつくることには反対、という股裂き状態です。自然発生的には何も起こるわけではない。特に七〇年代の中頃以降は、全共闘運動が終わって京大だけが「人民の海に浮かぶガラバゴス」と言われていて、自然発生的に大量運動が起こるような状況ではなかった。活動家が無理して無理して起こしていた。この「無理」を「可能」にするのが最大限綱領レベルの世界認識であつて、そういうものがほしいという要求です。世界大の認識をバトスにしなければ、

こんな危ないこと、馬鹿な努力はやってられない。八木沢 僕はそういう党観には違和感がある。

市田 では、どんな党観だったのですか？

3

八木沢 政治過程論は関西ブントの一つの党派性を表現したというの事実です。しかし、それは僕が冒頭に言った綱領的な立場とは全然違う。六〇年安保闘争があのようなプロセスを経てあの運動になったというのを客観的に描いているのが政治過程論です。それに対して、当時の第一次ブントの党内闘争を経て最後に革共同にいったメンバーは、六〇年安保闘争のときには評論家的に何もやらずに「労働者の立場がない」とか難癖だけを付けてだけで、それで黒田寛一の論理にはまったにすぎない。京大で言えば北小路さんとか小川さんなどの諸先輩が革共同に行きましたが、僕たちからすれば「何をぬかしているんだ！」と思った。六〇年安保闘争はブント全学連があのよう「指導」することによって、あそこまでいったのだと。そのように肯定的に評価するというのが政治過程論です。これによって、六〇年安保闘争におけるブントの「指導」に対して難癖をつけるところに對して党派性を持ち得たのではないかと僕は考えている。

僕の場合であれば、あのような政治過程論的なプロセスは次にどういうものとして進むべきなのか？ 次に、それはどういう条件でより進んだ運動になるのか？ ということを考えて、その結果としてソヴィエト論に行ったのです。

市田 政治過程論を当時の状態の記述ではなく、それ自体を綱領

来は政治生活に参加していなかった人々の何十倍、何百倍の人々が参加することであると言っていますが、今でも僕は革命は大衆が行うものである以上、そういうものだと思います。

市田 では、そこで党は何するんですか？

八木沢 世の中に惨禍をもたらしていることに對する全面的な政治暴露です。そして、そのような状況を解決するための当面のプログラムを提示することが党の任務です。

市田 政治暴露するということは本やビラを書くことなんですか？ 僕らはそう問うていたのです。そんなことなら革マルもやっているではないか。「これが正しい認識である」と言っているに知らせたら、後は世間が何とかするよという考え方はおかしい、間違っている、と思つてた。今ならなおのこと言いたいですね、暴露するだけで世の中が動くような「秘密」なんてもうどこにもない。その次に「では、どうするのか？」というところに党の意味があるだろうと当時の僕は思つてました。もし「指導部」にボジティブな質が認められるとすれば、「どうするのか？ オレはこうする」としたものを実際にやってみるところです。学習会とビラまきだけの運動なんて絶対にやりたくなかった。「当面のプログラム」がはつきりしているとしても、それを文字にして撤くだけでは何の意味もなく、その「プログラム」と実践の間には実は大きな断層があつて、そこを何とか考えられていない要素があるような気がした。似たような「プログラム」はいっぱいあるのに、実践の現状がこんなにしょぼいとしたら、プログラムの内容よりプログラムという考え方自体にどこか問題は

的な重みを持つ一つの党派性の軸として捉える、と僕たちは受け継いでいた。あれこそ綱領的なものと見なさなければいけない、と積極的に思つていました。八木沢さんがそこからソヴィエト論に行くのは非常に自然なことだと思ひますが、僕は、学園における二重権力状態の創出とか言つて、即、実践につなげていた。

八木沢 六〇年安保闘争を越えるものとしての現代革命とは一体どのようなものであるのか？ ということで「ドイツ革命の敗北とローザ・ルクセンブルク」(関西ブント機関誌『烽火』所収)、これは僕の青春の書ですが(笑)、それを書いたのです。そこでグラムシがロシアのソヴィエトにあたるものとして示したドイツのレーテとイタリアの工場評議会とかの領域とそれを指導するものとしての党というところについて。グラムシと言うと構造改革あるいはトリアティ路線の源流であると言われてきましたし、今でも一部そのように評価されていますが、僕はそうではないのだ、レーニンに忠実なのだと言いましたし、今でも思っています。

先ほど言われた最大限綱領的な運動についてですが、綱領は理論的・原則的部分とレーニンが言っている部分と、具体的なプログラム、つまり「当面の要求」によって構成されている。世界観とかイデオロギーの部分と世の中をどうつくり変えるのかというプログラム、つまり実践的部分がある。ですから、統一戦線などを世界観で統一するということはあり得ない。党には党の影響下にある先進的な部分が結集するのであり、圧倒的な大衆は今の悲惨な状況をどのように具体的に変えるかというプログラムによって結集するものだと思います。レーニンは、革命の条件とは、従

ないのか。あるいはプログラム観、党観が間違つてるんじゃないか。「いかにして」の答えとして、「学習して論文を書く」は大した答えになつていない。

八木沢 もちろん、そうですね。大衆運動は、榎原さんが言ったように自然発生的に「起こるもの」だという側面と、市田さんが言ったように「起こすもの」だという側面の両方がある。階級意識は、ビラや論文を書いて示すことによって形成されることもないこともないのですが、圧倒的には現実の生活や運動の体験を通じてしか形成されない。そういう意味では、党は運動をつくるものであると言つていい。だからこそ、党は、現状はどうしてこのようになっていのかという分析とそれを解決するための構想を持つていなければならぬ。僕はクラシクな党観を持つている。

市田 よくわかりますが、関西ブントからもうすでに数十年間が経ち、それだけでは済まないからいろいろ悲惨な歴史があつたのではないか。当時の実感では、その党観では済まないからこんなエグイ状況になつていのではないか、という疑問がありました。レーニンを党を呼号する党派がこんなにたくさんあつて、内ゲバやりあつて(中核と革マルだけじゃあない)、ほとんどギャグじゃないか。第一次ブントの人たちや第二次ブントの人たちが唱えていたことが、どこか空回りしているような感じが非常にした。「それでどうなの?」「その後どうするの?」と問い詰めた気分だった。かといって、自分たちに解決策があるわけではなく、暗中模索状態でずっとやっていたにすぎませんけど。ブント系の京大学生運動がダメになつたのはどうしてなのかというと、明らか

に中核派のせいだと思つてます。僕の次の世代の同学会指導部になる人間を全部引っこ抜いていったのです。学生運動の本質的弱点は数年おきに世代交代していかなくてはいけない点です。次から次に「指導」をやらせていかなくてはいけない。運動の後退局面で指導権限あるいはその義務を譲られると、譲られた方はたまらない。僕の後の世代は僕から押し付けられたみたいな格好になつて、どうして良いのかわからなくなつて、右往左往した。そこに「オレらが指導してやる」と中核派がきた。それで、ごそつと丸ごともつて行つてしまつた。バランスをとりながら暗中模索、試行錯誤しつつ何とか維持されていたものが、世代交代しなければいけないときにあつたという間に全部パアになつてしまつた。結局「党」をもつての方が強かつたわけです。「なにくそお」と思いましたね(笑)。それで中核に行つた連中の中で僕がいちばん良い奴だなあと思つていた人間が革マルに殺される。両派ともいっしょにされたら怒るでしょうけど、二つの革共同にはしてやられたという実感はありません。

表 八木沢さんがソヴェエト論の方に行つたというのは僕もよく分かるのですが、レーニン自身が一九〇五年から七年の時点でソヴェエトをどの程度評価していたのかという問題があります。

八木沢 いわゆる蜂起の機関でしょ。

表 そのです。その時期に非常に微妙な問題がありますよね。四月テーゼ直前のスイスの青年たちに話した内容です。あの講演をしたときに下においていたメモを見ると、トロツキーのソヴェエト論を読み直していることがわかる。ずいぶんトロツキーと喧嘩

とに興味があるかもしれない。代替国家、下からの革命に続けて上からの革命を準備 執行する機関、という。ソヴェエトというのは二つの国家の「中間」として目的意識的に作られるべきものなんじゃないですか。

八木沢 基本的に僕は榎原さんの論理には反対です。党と国家は全然違うものです。党はあくまでも任意の誓約者集団です。国家は誓約者集団でもないし、大衆がつくるものです。

榎原 連合赤軍はそれをつくつてしまつたということです。市田 任意の誓約者集団といつても、活動にコミットするときはいろいろな任務を分担しなければいけないし、国家机关の部局に等しいような任務を持たなければいけなくなる。「書記局」なしに党はない。誓約と言つても「もう、やめる」と言つて簡単に許されるものではないでしょ。

八木沢 本来的には、党には離脱の自由はある。

表 ここでは左翼の党に限定して話していますが、実際この問題をもつと突っ込んで話していったら、ブルジョア政党和左翼政党とはどのように違うのか? というアプローチも必要になりますよね。

市田 当然僕らの間でもそういう議論はありましたよ。連合赤軍問題をどう総括するのかというときでも、一旦加盟した以上、あくまで指導部の意志に従わなくてはいけないというのはいかんだらう、しかし局面ごとに一旦やると決めたら離脱は許されないし、それぞれのステップごとに抜けられる段階と抜けられない段階があるだらう、とかね。一旦抜けられない段階に突入したら、それ

していたのに、ソヴェエトの意義をも一度考え直している。党が大衆運動をつくる側面と大衆運動が先に起こつて党がつくり直される面というのがあると思うのですが、全共闘運動には後者の面が果たしてあつたのか?

八木沢 レーニンの場合、一九〇五年の革命でも蜂起の機関といふことで触れていますが、ソヴェエトを意識的に位置づけて積極的に評価しているのは一九一七年です。ところが、最近ローザ集を読み直して思つたのは、ローザはあれだけロシア革命(一九〇五年)について指摘しており、それはおおむね正しいのですが、ソヴェエトについてほとんど触れていないのです。あれは不思議ですね。普通ならばむしろローザの方がソヴェエト論がありそうなのですが、ない。

表 おそらくわからなかつたのでしょね。

市田 これは後知恵的に思つたことですが、また、榎原さんが言われた軍事組織をつくと国家の中の国家になるといふこととながらなのですが、モデル的に言えば、非合法共産党的なものによつて工場内フラクションあるいはソヴェエトを指導する、労働運動を裏から指導するという形態は、ある時期までは有効だったかもしれない。労働の現場が工場に集約され、国家が資本主義を総括している時代、日本で言えば戦前から高度成長期になるのかもしれない。そういう時代には、資本主義は国家に集約されているわけだから、国家を倒すことに意味がある。そして、国家の廃絶は、国家が力を持っている以上、国家権力を一旦取ることによつてしかなされないという点では、党をプチ国家としてつくるこ

はほとんど国家的な強制ですよ。抜けようとしたらリンチまがいのことだつてするわけですから。

榎原 党だからリンチするのであつて、国家は監獄に入れてしまふ(笑)。

八木沢 ボルシェヴィキの場合、一九一八年にブレスト講話をめぐる大論争がありました。そのときレーニンは講和は屈辱的だのまなければいけないと一生懸命言い、それに対してプハリーンを先頭にする左派グループは革命戦争だと言ひ、トロツキーは講和もせず戦争もしないという中間の立場をとつた。そのときに左派はボルシェヴィキを離脱するぞとレーニンを恫喝するのですが、それに対してレーニンは「党の決めたことに従え、だけでも批判するのは自由だ、この局面では中央委員会に責任を持つ必要はない」と言つている。僕はそういう党が良いと思う。

市田 僕も、超歴史のかつ理論的に考えられることではないという気がだんだんできて、国家権力を取ることを意味は歴史的に変わると思ひ出したのです。歴史的な問題、つまり宇野派的な段階論の現状分析の問題と、そもそも国家権力とは何か? という問題を区別しながら、僕の場合はアルチュセールやフーコーへの関心につながつていった。そして、もういわゆる国家権力に意味はないだろうとだんだん思うようになっていった。資本主義が国民国家に総括され、内包的な発展を遂げているような時代であれば意味があつたかもしれない。そういう時代だつたら、国家を模したような党をつくつて国家権力を取れば良かったと思う。七〇年代の終わりという、世界史的に言えばベトナム戦争があり、そ

の後にオイル・ショックやドル・ショックがある、というグローバル資本主義の力が全面化してくる時代になればなるほど、国家権力を取っても大したことはできないのではないかとということが実感して持てるようになってきたのです。

榎原 市田さんは戦前の共産党を非合法党であるとおっしゃいましたが、僕はそうではないと思います。レーニンの『何をなすべきか』は全面的な政治暴露をやるための機関紙としての全国的政治新聞について提起したと考えられています。実は機関紙の配布網をつくれれば武装蜂起を指令できるということまで言っています。武装蜂起できる組織をつくるために提案しているのです。ところが戦前の日本共産党はコミンテルンの指導下にあり、そんな発想はもろくありません。コミンテルンが掲げた共産党のポリシェビキ化というものは権力奪取後のロシア共産党のやり方を世界に輸出しようとしたものです。プロ独の下での共産党ですからフラクションをつくって大衆運動や組合を指導するという事になります。だから、あのモデルは非合法党のものではないし、合法党としても権力の座にいない党にとつては基本的におかしいものだと思います。戦前の共産党は、全国的政治新聞なんか一生懸命やっていないでしょ。フラクション活動ばかりしていた。

八木沢さんと僕との違いは結局軍事組織をつくるか、つくらないかということになるわけですね。八木沢さんをつくることに基本的には反対しているわけですね。七〇年のあの時期に軍事組織をつくったことをどう総括するかということです。

八木沢 あの時期に世界的に見てもああいう形で軍事的な党まで

ら、プロگرامと現在の諸要求を媒介するときの「いかに」問題への解答として持ち出されてきたようなものでしょう。この「現在」に軍事が必要かどうかは、あくまで現状認識というか、かかわっている現場次第のような気もします。機動隊に負けてばかりのところになれば、軍隊を！ ということになるし、労働者をいかに獲得するかという問題に軍隊は何の答えにもならない。一言で「打倒」と言っても、それが具体的に何を指している、どうすればいいのかはまったく別問題。

4

表 こうした国家権力をめぐる問題からネグリにいった場合、どのようなことが考えられると思いますか？

市田 僕がネグリの方に行くまでにはいろいろと理論的な紆余曲折がありましたし、今でも完全にネグリ主義者というわけではないのですが、それでも今ネグリたちといっしょに『マルチチュエード』という名前を冠するような雑誌を編集し、ネグリが発展させてきたような考えを仮説的なプロگرامとして共有しつついろいろやりましょう、というところまでは来ています。そこへ行くまでは、自分の日本における運動経験から見ても、もう国家権力を取ることに一生懸命になってもしょうがないだろうということが実感としてあった。そして、同じようなことがイタリアの運動ではもつと大規模かつ実践的に問題化されていた。

イタリアのオペライスモ（労働者主義）とアウトノミアの運動

行ったというのには時代の必然ですよ。そういう意味では当然のことながら承認しますよ。

榎原 そこで、僕はそういうことが党にどういうリアクションを与えたのかということの問題にしているのです。政治権力を取ることを最重要な課題として考えるならば、最大限綱領と僕が言うのは、権力を取ってから何をするかということですがそれを明確にしておくということです。それを抜きにして、何となく権力を取りたいだけではどうしようもない。

八木沢 それがプロگرامです。綱領は原則的・理論的部分と具体的な現在の諸要求であるプロگرامから成り立っている。

榎原 諸要求というのは権力を取る前の今の時点にあるものでしょ。

八木沢 取った時点で「何をやるのか」です。当時はツァーリ全体主義を打倒して、民主共和国と八時間労働と土地の解放と国有化というボルシェヴィキの三本柱と言われているものが、四月テーズからボルシェヴィキが権力を維持できるのかという一連のプロگرامに行く。レーニンは四月テーズで、自分は社会主義を直ちに要求しているわけではないが、今のロシアの惨禍を解決するためにこれはこれしかないとやっている。銀行や主要工場や鉄道の国有化を提示する。綱領とはそういうものですよ。

榎原 では、今どうするのですか？

八木沢 そこで、僕とお二人との革命観が違ってくる。

市田 軍事組織をつくらなければいけないという状況を体験したかしないかは、結構大きな違いなのではないですか。軍事はほと

は、工場での生産が生産の中心であった時代であれば、党が工場労働者を組織するという型の運動で良かったのだけでも、生産そのものが社会化され、社会全体の工場化という現象が高度に発達した資本主義社会で生まれると、工場内労使関係が運動の軸になることすらなくなっていくのではないかとということ非常に先鋭的な形で突きつけた。

そうすると「国家とは何なのか？」という話になる。国家そのものも、資本主義を総括できるような存在ではなくなってきたいものではないか。オペライスモは極端なところまで進むと、権力や資本の方が労働者階級の力の前に受け身的である、国家権力のほうをむしろ右往左往する反動として捉える視点を前面に打ち出す。社会化した工場、工場化した社会とは、古典的資本主義とは違って、その外に立つハードな国家にはとても抜いていく操作しがたい柔軟性や散種性をもっている。だからアウトノミアは、工場の外で自律空間を作り、拡げていく意味と可能性を主張したわけですが、こういう難しさは今日のネオ・リベラリズムと言われるような国家統治の理念のほうに敏感かつ非常に分かりやすい形で語っていると思います。ネオ・リベラリズムは、要するに国家が市場に奉仕するという考え方ですね。国家が市場の内包的発展の中でイニシアチブをとるというケインズ主義的な考え方はダメになったということも国家自身が言っている。

そうなる、国家権力を取っても非常に限定されたことしかできないのではないか。ネグリたちが（帝国）と呼ぶ今日の状況、グローバル化された世界市場に対抗する路線として世界的規模で

主流なのは「健全な国民国家の再建」路線です。市場の暴力を食い止める装置としての国家みたいな考え方であり、アタック（ATTACK）の「金融市場の暴力に反対する」というスローガンです。そこでも確かに国家は受身的なものとして捉えられている。

しかし、現在の国家は健全に再建されることによって市場の暴力を止められるようなものなのか？ それでもって市場そのものをポジティブな方向にコントロールしていきけるものなのか、というところが一つの大きな分かれ目になる。国家が有効、広い意味で「強いもの」であれば、国家権力を取ることに意味があるかもしれないし、健全な国家という路線は正しい。しかし、それでは塩見さんの民族主義路線や新しい歴史教科書をつくる会の路線と大差ないと思う。そこに賭けることはできないのではないのかというのが僕の基本的な情勢認識です。おそらくマルチチュード路線は「非国民国家」にいちばん重きをおいた路線だと思います。その限りでは正しいのではないかと思っています。

八木沢さんは階級闘争には強固な指導組織が必要であると言われていますが、それで何をしますか？

八木沢 僕はネグリの考えはほとんどでたらめだと思っています。ただ彼が〈帝国〉という形で提示した時代認識については、いろいろ言われていますが、あのようなドラスチックに言ったことの意義は認めます。「革命のサイクル」を考えた場合、一七八九年のフランス革命から始まって、いわば産業資本主義の確立期の真ん中四八年を経て帝国主義に移る直前の最終段階のパリ・コミューンで終わるといって一つのサイクルが終わって、そして一

もう一つは、変革の主体であるマルチチュードについてですが、非物質的な労働に変わり云々とか、産業が農業から工業へ、現在はサービスと情報産業へと中心が移りそこで量的な問題ではなく質的な問題であり、何がヘゲモニーを握るかが問題であると言っています。しかし封建時代における農業から工業へと、現代では非物質的な労働がヘゲモニーを握っているというのは意味合いが全然違うのです。依然として資本主義的な生産をベースにしているのです。

非物質的な労働の比率が増えているのはその通りだと思いますが、だからと言って工業プロレタリアートが革命の担い手にならないという結論にはならないと思う。ネグリは注意深いから、自分はこのことを言いつつも、片一方ではこういうこともちやんと認識していると言いますが、今のグローバルゼーションは、資本主義のコントロール・タワーとしての先進国とその周辺の中国をはじめとした世界の工場があり、それを総括するものとして多国籍企業があるという図式がある。それで非物質的労働と言っても、今増えているのは、商業とか金融とかありますが主にはマネーケイティングやコントロール・タワーの情報管理をするものがヘゲモニーを握っているのであって、非物質的な労働でつくられるネットワーク状に形成されるマルチチュードが革命の主体になるというのはまったくでたらめだと思います。

さらには、情動的労働と言われる労働の自身は、サービス部門と言えどもまさにプロレタリアートの的なものであり、今のグローバル社会の中では悲惨な状況になっているわけですから、そ

九〇五年のロシア革命から始まる、要するに帝国主義時代における革命闘争という一つのサイクルは、僕が考えるのは一応ベトナム解放闘争の勝利で終わった。したがって、ローザが言っているように、一九〇五年革命は当時の第二インターナショナルの主流はフランスあるいはドイツの四八年革命などの中で最後のブルジョア革命であるという認識に対し、そうではなく、未来に向かった新しい形態の革命なんだと。一九〇五年の革命から帝国主義段階に対応する革命が始まりベトナム解放闘争で終わるのです。七〇年代にそのサイクルが終わり、その間にケインズ型の福祉国家が破綻していき、多国籍企業を軸にしたいわゆるグローバルゼーションという新しい段階に入った。そして、それに対する革命の第三サイクルのとは口口に現在のわれわれはいるのではないかという歴史認識を持っています。ネグリの言っていることの中身には反対ですが、旧来の古典的帝国主義に対応した革命運動から次の段階に移らなければいけないと言っている時代認識としては評価します。しかし、内容に関してはまったくでたらめだと思います。

市田 そのでたらめな内容とは何ですか？

八木沢 一つは柄谷行人も書評で書いていましたが、国民国家の持つ重みを軽視しすぎているということです。EUのように、トロツキー流に言えば生産力と国民国家の矛盾、国民国家の枠に収まり切れないということがあるでしょうが、しかし現実には依然として国民国家に総括されるのであり、ネグリの言う〈帝国〉のようなものは帝国主義同盟であると僕は依然として考えています。

うことをバネにして次の革命のサイクルが起こりつつあるのではないかと思っています。そういうところでは、マルクスレーニン主義ではないですが、ハーヴェイ（著書『新自由主義』、作品社、で知られる）の言っていることの方がピンとききます。

榎原 例えばスターリン主義の理解では、国家が労働者階級を押し支配していると言っているのですが、これは資本の支配ということを見ていないのです。労働者はみんな工場に働いているのだから、労働以外のその他のことをやっている暇などなく、民衆が資本のくびきにつながれているということを根拠にして、今の社会は安定しており、だから国家機関は民主主義体制でやっていけるのです。そのようにプロレタリアが市民社会に縛り付けられているから国家が相対的に独立したポジションでいるろなことができることとされていたのが福祉国家の体制でした。しかし、今は市民社会が揺らいできて、市民社会の保全がどうしようもなくなってきたから、先ほど国家の再建と言われましたが、むしろ市民社会の再建と言った方がすっきりするのではないかと思っています。

ネグリに関して言えば、彼の『経済学批判要綱』研究（マルクスを超えるマルクス』、作品社）を見ると、彼の特徴はマルクスが経済学の範疇で考えていることを全部政治学的範疇に読み替えているところです。僕はそれはおかしいと言ったのですが、『情況』二〇〇五年四月号「ネグリの要綱研究」参照）そこには彼の独特なイメージがあると思います。

それから『構成的権力』（松籟社）については、以前杉村さんに

書評を書いてほしいと言われたのですが、全然書けなかった。ネグリは憲法制定権力にもすぐ期待している。また、民主主義にもものすごく期待している。僕にはそのような発想は全然ない。なぜ、ネグリはそうなのかということが、この前の市田さんのラシエールの話を聞いてはじめて分かりました。

日本人には民主主義についての根底的なイメージはないと思います。しかしヨーロッパの人たちには「デモクラシー」はギリシヤにおける「デモス」のイメージがある。そこでラシエールが言っているのは、民主主義は政治制度とか国家なのではないと言う。市田さんの紹介（市田良彦著『ラシエール 新（音楽の哲学）』、白水社）によると、ラシエールは『プロレタリアの夜』の中で、労働者は自らの力で階級意識を持てるようなものではなくインテリゲンチヤが階級意識をテーゼとして与えてそこから学ぶことによりって意識的なプロレタリアートになるという通説的な考え方は嘘だということを、一九世紀の労働者の状態、特に夜に何をしていのかと問うて読み解いていっている。労働者の蜂起の元になっているのは、昼に職場に縛られつけられている生活の奥に本能的に持っているもの、人間である限りこの社会の中での共同のもの、意識化できないかもしれないが感性的に分有しているものが、政治として舞台に登場してくるということです。そして、そこだけに民主主義があると。ネグリがなぜ経済的範疇を政治的に読むのかということの理由はそこにあるような気がしています。あるいは、なぜ民主主義をそんなに高く評価しているのかということ、国家とか制度のもっと下のレベルで民衆が置かれた状態がもたら

ているところですか。「国家」と言われているものを近代主義的な国家観で捉えないという意味です。だから（帝国）のような国家以上の主権的存在も考えることができるし、帝国主義同盟は確かに現在もあるでしょうけど、それもまた（帝国）への反動として把握する視点が出てくる。今日の「主権」は国家を越えた次元で考えたほうがいい。近代主義的に考えているかぎり、国家間のパワーゲームに政治は還元されてしまう。

榎原 そこで「構成的権力」というものが出てくるわけですね。市田 そうです。近代の歴史の中でわれわれが「国家」と呼んでいるものは、ヨーロッパの一八世紀、それ以前から根はありますが、そこで形が整えられて全世界に広まったものです。共和制であれば、社会契約論的に暴力のすべてが移譲されたものと考えられる。とにかく共同性の政治的な総括としては国家しかないというところで二世紀ぐらい我々は過ごしてきている。しかし、それはそもそも限定されたものでしかないだろう、というのがネグリの国家論であり、それは状況・歴史認識とは一定別の次元にあります。今、どういう別の共同性を構築できるのか、そんなリアリティはないという考えは近代主義的な見方です。彼は、現に「国家」と言われているものを近代的な国家観とは違う枠組みの中に置いて見直してみるべきではないかと仮説的に提起しているだけでしょう。そのことが「構成的権力」になっていく。

「構成的権力」は「憲法を超える権力」ですが、普通それは憲法を構成したら「構成された権力」となって終わる。そのなかに姿を消す。けれども、構成的権力はそれがあつた限り構成された権

す一つの力みたいなものを考えているからではないかと思えます。

僕が今いちばん関心があるのは「政治」をどのように考えるかです。僕は協同組合運動も大衆運動の一つとして考えます。「いま・ここ」での社会変革の運動ということ。そういうものが、例えばフランスでは社会的経済という形で定型化されていたり、イタリアでは協同組合陣営という形で定型化されていますが、しかし日本では定型化されてはいない。結局、そういう運動は市民社会の再建なのです。今の時代に新しく若者たちが自らをワーキングプアと位置づけて運動を始めていますが、それが労働組合や労働者政党にとどまらずに「貧困ネットワーク」になっていくのはなぜかというところ、「自分たちで食えるようにしよう」ということがあるからです。食えるようにするためには事業をやらなければいけない。それ自体が面白いになっていく。そういうイメージを大切にしたいと僕は思っています。ネグリにはその辺はあまりないと思えます。

市田 八木沢さん一つ言いたいことがあるとすれば、国家を超える共同性を考えることはしないのですか、という問いですが、国家が政治的共同性の要であるというのはそれ自体で近代主義的な国家観です。国家が共同体を総括する「主権的存在」「最高存在」であるという近代主義的な国家観に囚われていれば、国家を超える政治的なものはない。ネグリは甘いということになる。けれども彼の面白いところの一つは、国家自体を考え直しましょうと言っ

力の外にあり、そこからもう一度別のものを構成することがいつでも可能なはずだというのがネグリの原理論的な考え方です。榎原さんは協同組合的なものだって政治性を持つと言われましたが、まさにネグリの視点であつて、いずれにしても国家権力に総括されない恰好で「権力」でない「力」がつねに作動していて、「市民社会」のポテンシャルな政治性を担保しているというわけでしょう。協同組合は構成的権力を育てることができる。ネグリもイタリアに帰った後、一時期生協の理事に名前を連ねてましたね。彼の救援対策という意味もありましたけど。普通に「国家」と言われているものをそれが置かれている、あるいは浮かんでいるフィールドを変えて見直してみると、「国家権力を取る」と「革命」と考えることの愚かさが見えてくるかもしれない。権力を取らなくても、構成的権力は権力関係を変えられることができる。ところで、八木沢さんが言われる「革命」とは何なのですか？

5

八木沢 最終的には社会革命なり文化革命、要するに共産主義社会の実現です。ネグリの言っていることは、段階を経ずに共産主義社会にずるずるべつたりに行くとしか読めない。

市田 では、どういう段階があるのですか？

八木沢 プロレタリア独裁です。

市田 つまり国有化路線のですか？

八木沢 それについては中国やソ連やキューバの革命などの総括

を経てもっと考えなければならぬ。

市田 でも、フランスではミッテランは最初はまさに国有化路線でした。

八木沢 あんなのは社会主義ではありません。

市田 でも、銀行を国有化しましたよ。それによって産業国有化の糸口を付けましたよ。そして糸口を付けただけで破綻した。

八木沢 そのところはソ連や中国やキューバやユーゴの経験、つまり自主管理と言われるものの経験をちゃんと総括しなければなりません。ネグリの言っていることはロマンチックな永遠な運動にしかならない。

市田 彼一人に全体像を描く責任を負わせることは酷でしょう。一人の思想家なり理論家に古典的な意味での最大限綱領を全部書くことができるなどという期待はしない方がよい。僕は、ネグリがロマン主義的な語りをしたり、もつとひどいときにはカトリック的な言説を持ち出すことに眉をしかめることもあります。そんなところで彼を責めようとは思いません。

表 ネグリの「構成的権力」の考え方は、彼ははつきり言っていますが、実際はマルクス自身が言っていたことです。『ヘーゲル国法論批判』は立法権と憲法とはどちらが優先するのかという議論を近代的な国家権力のあり方の自己矛盾としてきちんと言っています。不思議なことですが、『ドイツ・イデオロギー』や『経哲草稿』が高く持ち上げられるのですが、『ヘーゲル国法論批判』をまともに読んでいる人は世界中にほとんどいないのです。結局、国家権力だけが権力なのか？ という問題です。グローバ

ら、その延長線上には権力を取らなければいけない瞬間が出てくるかもしれない。しかし、サパティスタは武装組織でありながら権力を目指さないとやっている。リアリティとしてはそちらの方があると僕は思う。

八木沢 そういう社会的な力は、既存のブルジョア的な国家権力を一旦は破壊しない限り実現しません。

市田 ブルジョア的な国家権力の破壊とはいったい何ですか？

八木沢 人民が権力を握るということです。

市田 その中身、人民権力っていったい何なん？ というのが、七〇年代の運動からさんざん問題にされてきたことではないんですか？

八木沢 既存の国家権力に対して、ロシアであればソヴィエトという労働者人民の自主権力が存在するのです。「権力」という言葉が嫌いならば、「力」でもいいです。

6

榎原 今日の革命運動が直面している困難について考えるときに、ソ連の崩壊の総括ができていないところに原因があるのではないかと思っています。僕は、労働者階級が資本家階級に対する革命的な力を持ったときに、資本制的な外皮が社会化されることで何とか革命になることを凌いでできていると見ています。二九年恐慌で金本位制を管理通貨制にしたとか株式会社一般化したなどという形で、ブルジョア体制自体の外皮が社会化されて社会主

リゼーションの問題で言うならば、六〇年代の中頃に谷川雁が公的に書いていた最後のもので「単一世界権力論」というものがあります。

『朝日ジャーナル』が終わる最後の方で「変貌する社会主義」という特集をソ連が崩壊した直後に組んでいます。そこで谷川雁は、アナコンダのように蛇が自分のしっぽを噛んだ、そのように単一世界権力は自己構成していく、革命が起これば起これほど単一世界権力のレベルは上がっていくと言っています。これに對抗するものとしては宮沢賢治がいる、要は「物語」です。

「国家の終焉」と言ったときに一方で考えなければいけないのは、谷川が言ったような世界単一権力を想定すべきなのか？ ということと同時に、フーコーが言うように、権力は遍在しているということも考えておかなければ、国家権力の否定論は成り立たないと思います。

さらには、国家権力を取ることに意味があるのか？ と言ったときに僕はむしろ国家権力を取ることはヤバいことであると考えています。二〇世紀の教訓は国家権力を取る闘争をやると、ファシズムがスターリニズムにしかならないということです。

市田 僕は、一方で依然として国家権力を取ることに意味があるのなら限定的に取っても構わないとも思っています。サパティスタを例に考えてみると、彼らは国家権力の奪取を目標にしているとはつきりと言っています。けれども国家権力を取ることができない局面が出てきたら、彼らも取るかもしれませんよ。蜂起し、オートノマスな空間を広げていくという運動をしているわけだけ

義のモデルに近づいているということがあります。国家権力は、もちろん社会的な運動を抑圧するのですが、むしろ市民社会の内部で社会的な外皮を拡張しようとする方が先行しているのです。しかしこの傾向が逆転してきています。特にソ連崩壊以降はブルジョア階級だけが階級闘争をして、新左翼の一部も含め「もう階級はない」と言っていました。ブルジョア階級の階級闘争によってこの間言われている貧困化が現れてきています。そういう巻き返しできた背景には、金融の時代になったということが非常に大きいと思います。それについての分析もちょっとできていない。ネグリが〈帝国〉と言っているのは世界単一の資本市場のことですよ。

市田 ジョージ・ソロスも〈帝国〉という言葉を使っている。金融市場のヒーローと左翼の大御所が、期せずして同じ世界認識を持っているというところがいかにも今日的で面白い。ちなみにオペライスマの人たちは榎原さんのいう、外皮が社会化された資本主義のことを揶揄的に「資本の社会主義」と言っていました。また、今日の金融資本主義や知識資本主義を「資本の共産主義」と呼んでたりします。

表 「インペリアルイズム」を日本語にする場合、本来ならば「国」という語を使うべきではないですよ。全然意味が違う。だから、国家権力をめぐる議論や実践はナシヨナリズムになるというのがいちばんの問題だと思う。だから護憲もナシヨナリズムになる危険性がある。資本の方がナシヨナリズムを超えているのに、なぜ反対派のわれわれの方が超えられないのか？

市田 グローバルな金融権力に対してナショナリズムはすでに無効ですよ。

榎原 ブルジョアジーが新たな階級闘争しかけることができるのは世界単一の資本市場があるからです。トヨタやキャノンなどが賃金を抑えることができるのは「国際競争に負けますよ」ということを殺し文句にできるからです。

表 水野和夫が『人々はなぜグローバル経済の本質を見誤るのか』（日本経済新聞社）の中ではっきりと「資本の反革命」と言っています。こちらの方も資本の反革命という意識を持つべきです。

市田 国家権力を通してグローバル市場のコントロールという点ではアタックがそれを主張してる。世界市場全体に対して国家のネットワークでもって税金をかけようとしているわけですか。しかし、そのアタックの運動が現実になっっているのかというと、フランスのアタックはほとんど白人ばかり。彼らを支えている意識は「移民が来てほしくない」「移民が来なくてもすむような世界をつくりましょう」、ではないのか。先進国の人間が「第三世界の発展」に「連帯」しようとするとき、「あまりこっちに来ないでよ」という意識がどこかにある気がしてしょうがない。だから僕はアタック流の市民運動には懐疑的です。もちろん、移民が来ないですんだらそれにこしたことはないのだけでも、世界的な規模での人口移動が起こらざるをえないような状況が一方であるのだから、「来たいのなら、来ればいい」ということを引き延ばしていく方向で考えた方がよい。そのときに八木沢さんはどのような立場をとるのでしょうか？

あり、それに対する敗北の結果が現状となつて出てくる。今、それに対する反撃のとは口にいると僕は思っているのです。

表 原則論としては、世界最低賃金の上昇を出さないといけない。市田 最初からそういうことを言わないといけない段階に来ていると思います。

八木沢 そうです。世界同時革命の物質的条件は整いつつあるということですよ。

市田 それしかない時代にあつて、それぞれの国で国家権力を取ること、それを第一に目指すことにどれだけの意味があるのかということですよ。

八木沢 しかし、現実には人民を支配しているブルジョアジーの国家権力があるわけですから、それを取っ払わない限りことは始まらないというのは当然のことではないですか。

表 要は「どこから始めるのか？」ということではないでしょうか。姿を見せないけども資本の側の世界単一権力は成り立っている。この成り立っているものに対して、こちらからあらゆる角度から進撃していくというのはやらなければいけないことです。そのときに近代的国家観ではダメだろうというのをとりあえずの出発点にしてはどうかと思っっているのです。その限りでネグリの仮説は出発点になるのではないのか。

八木沢 レーニン「ヨーロッパ合衆国のスローガンについて」で、現実の生産力が国境を越えている傾向があるのはその通りだが、帝国主義戦線のそれぞれの国のプロレタリアート人民にもたらししている惨禍を無視することになるから、そんなスローガンは

八木沢 それはマルクスが言った通りです。プロレタリアには国境はないのです。

市田 ということは、いくら来ても構わないということですか？

八木沢 原則的にはそうですね。

市田 そのことが自国のプロレタリアートの利害と相反するとしてたら？

八木沢 相反しないようにするということです。現代ならば、ヨーロッパであれば北アフリカや東欧、日本であれば中国の賃金並みで働かなければ国際競争力を失うから、雇用を失いたくなければそれに並べという不断の恫喝がある。

市田 そのときにどういう運動をするのか。あるいは政策を掲げるのか。日本の労働者に向かつて、国際連帯の名のもとに中国並みの賃金で我慢しろと言うのか？ それとも中国の賃金を上げる運動を日本でするのか？ 日本で権力を取って日本人労働者を代表するならば、中国人労働者の敵になる覚悟ぐらいはしとかないと。八木沢 もちろん過渡的に考えなければいけないことであつて、各国には一定の水準があるでしょうから、それを一挙に平等にすることはできません。

市田 社会民主主義も含めたヨーロッパの左翼が瓦解していったのは、その問題を現実にはクリアできなかったからだと思います。「現実には」というのは、国家が資本主義を総括し、労働者を代表するという枠組みの中では、という意味です。

八木沢 それには潮目があるのであり、七〇年代以降のレーガン、サッチャーから始まる一連の攻勢、つまり資本の側の階級闘争がいけないと言っています。今のグローバルバリエーションの中で資本が国境を越えていっているというのはその通りです。かといって、ブルジョアジーの国家権力をどうするのかということ抜きにして革命を語ることはできない。

市田 今の国家は単純なブルジョアジーの権力ではありませんよ。教科書的にも「レーニン主義」的な道具的権力観は遥か昔にアルチュセールやフーコーによって無効が宣言されてるでしょう。権力が道具であれば握ることもできる。権力が暴力装置であれば、警察を取れば国家権力を握ったことになる。アルチュセールは、国家は暴力装置に縮減できない、イデオロギー装置も考えなければいけないと言った。それに対してさらにフーコーは、そもそも権力は握れるものではない、握ってどうにかなるものではないという論理を全面展開した。権力関係として社会の中に遍在している。だからどうしろとまでは、言っただけでね。

フーコーも一八、一九世紀の「ブルジョア権力」について分析してる。彼は「ブルジョア権力」がないと言ったのではない。その権力はしかし、人間を暴力でもって脅かすところに眼目があるのではなくて、つまるところ、労働者主体、「人間」をつくることを目的にしている。労働者主体をつくることはまさにブルジョアジーの利害に適つてるでしょう。朝八時になったらたたき起こさなくてもちゃんと働きに来てくれて、監視しなくてもさぼらず、自分の生活設計をきちんとしてくるような、放っておいても資本の下で働いてくれるような労働者として人間をつくるというのが権力であつて、その限りで資本主義の成立期では権力はブルジ

「ヨア権力だった。「人間をつくる」という意味での「教育」を、ブルジョアジーのために社会的に代行する点で、権力はブルジョワ的だった。」

そんなときに暴力装置を握っても実は大したことはできない。暴力装置は人間に対して否定的な作用しかせず、何かしたら「それはダメだ」と言っただけでどこかに閉じ込めるとか殺すとかという作用しかしないわけで、肯定的な教育・形成においては何もやらないう。今日の権力をめぐる最大の問題は、フーコー的に把握されたブルジョワ権力すら大して意味がなくなっているところにあるでしょう。それぞれの人間を労働者としてつくりあげ、彼らの職能別諸系列の全体が社会であるという見かけをつくることすら、資本主義の維持にとってあまり役に立たなくなってきた。古典的な言葉でいえば、集団としての労働者が生産主体として立ち現れてくる、つまり工場の中で結合生産が行われて階級意識が芽生えてくる、という事態が想定できた時代から、誰が物をつくっているのか分らない、おそらく全員が「全員として」物をつくっているとした言いようのない時代に入りつつある。いわゆる「国家」は、資本のためにこの共同生産に搾取と私有の網をかける制度である面を強くしています。いわゆる「弱者」だって、ビジネスチャンスを生産者に対して作ってあげて生産者だ。この金融全盛の時代では、「チャンス」そのものも立派な商品でしょう。近代がつくりあげようとしていた「個人としての労働者主体」は、いまやほとんど特権的な存在です。そうであるにもかかわらず、個人の主体としての人間観を必死に維持しようとして、給料はあくま

で一人一人が受け取るもの、人権の主体はあくまで「個人」だと言っているのは、恵まれた一部の保護、救済しかできない。こんな時代にあつては、フーコーが主張したようなブルジョア権力観でさえ有効だとは言えなくなっている。

道具的な権力観もフーコー的な権力観でもダメなわけで、八木沢さんが言われるブルジョア権力の今日の内実はどこにあるのか、と問いたい。

八木沢 それは最終的には実体的には暴力装置と官僚組織です。レーニンの国家観、つまり階級支配のための道具であるとか、マルクスでは総資本を司る委員会であるという考え方に対して、レーニンは国家のイデオロギー的支配を認めていないというのは曲解です。例えば『何をなすべきか』では労働者は組合主義的意識や社会民主主義的意識などのブルジョアの意識を刷り込まれているということを言っている。確かにレーニンは国家道具説といふことを言葉で言っていますが、けれどもそんな単純なものではない。

僕はグラムシもやっていますが、結局グラムシがヘゲモニー論で言っていることはフーコーなどが言っていることを言葉を変えて言っているのです。下部構造も含めた市民社会と狭義の意味での国家との分裂の中で、市民社会の上層構造である「社会」と言われるものに光を当てたことがグラムシの最大の功績だと考えています。しかし、鎧を付けた強制装置というグラムシの国家論は厳密な意味では間違っていると思う。グラムシは、トータルな国民国家と統治機構としての国家を一緒くたにしているところ

があります。けれども上部構造と下部構造の真ん中にある市民社会あるいはヘゲモニー装置を力説している限りでは、フーコーなどが言っていることを別の言葉で言っていると思います。フーコーの言っているような規律社会云々、権力は遍在しているということは僕も理解しています。しかし狭義の意味における国家の「重み」というものがある。

市田 その「重み」が結局警察と官僚機関であり、それをコントロールすればいいということであれば、市民で良いじゃないですか。あるいは「赤い旅団」みたいに「権力は銃口から生まれる」(これ以上に「重い」言葉はないでしょう)と言って、権力者を順番に暗殺していけばいいんだ。左翼の権力幻想という点で、市民とテロリズムは双子でしょう。八木沢さんも結局、市民的権力観を共有するんですか？

八木沢 違います。革命とは単に国家権力を取れば終わりということじゃないですね。経済、社会、革命への出発点です。市田 それでは議会で多数派をとって警察や官僚機構をより民主的なものにするという市民的な出発点でもいっっこうにかまわない、大して違いはないじゃないですか。

八木沢 市民では何も変わらないのは既に歴史が証明している。そこは僕はレーニンといっしょで一旦破壊しないことには成就しないということですよ。

榎原 レーニンも毛沢東も一生懸命権力を取ろうとがんばったのですが、ある意味では権力の方が「落ちてきた」のです。帝国主義戦争での自国の敗北ということがそのような状況を生んだので

す。そして、彼らはそれをちゃんと受け止めたということですよ。レーニンだって苦悩に充ちながら受け止めた。そうすると、今の時代に果たして落ちてくるのか？落ちてくるなら、どういう形で落ちてくるのか？そして受け止めるためにはレーニンの苦悩をちゃんと見なければいけない。

八木沢 革命家は革命運動のいちばんの盛り上がりで頂点で権力を取るのですが、しかしその後大衆は普通の状態に戻る。だから権力奪取後の「建設」の困難性がある。人々がやることですから、そんなに都合良くできるものではない。

榎原 だから「落ちてくる」のです。

市田 だから、レーニンの言っていることはレーニンの時代には意味があると思うし、あれが間違いだったという言説はおかしいと思う。しかし問題なのは、今はどうなのか？なことです。自覚的に革命を準備する党は有効なのか？ということですよ。レーニンの時代はどうであつたのかということと今はどうなのかというのは別の話です。

榎原 そうですね、現代に引きつけて考えるときこそ、レーニンはしんどかったといふところに焦点を合わさなければいけないと思います。

市田 それはその通りだと思う。だからといって、レーニンのやつたことをもう一度というのは現代では無理でしょう。しかしまた、社会革命や文化革命と言われる、メルクマールを持たないことを重視するような運動に政治を解消しようとも思わない。それもまた間違いだと思います。政治はあくまで共同の目標をもたな

いいじゃない。

表 権力問題を完全に解消することはできないということですね。

榎原 権力問題と言うと、国家権力をどうするかということになってしまいます。むしろ「政治」の意味をどうするのか？と考えた方が良いでしょう。それから、社民だからダメだということではなくて、社民が国家権力を取って右往左往していることをどう考えるかということです。

市田 僕もとりあえず議会で権力を取って警察や官僚機構を民主化することは全然無駄なことであるなどとは思っておらず、それはそれで意味のあることです。言いたいのは、考えることの土俵を変えたらどうかということ。つまり、何をもって「革命」と言うのか？ということ。

7

表 これまで話してきた権力をめぐる問題は、実際上は何をめぐって革命と言うのかということになっています。

榎原 そういう意味ではネグリの「構成的権力」は非常に面白い問題提起ですよ。構成的権力は一つの「力」だから、その「力」がどうあつて、どうしたら革命的権力になるかというように考えなければいけないということですよ。先に権力を取って、それから社会革命をするということではなくて、構成的権力をどう組織するのかということ。

レカリアート問題を問題にする人々にはそういう区別は受け入れられないと思う。そのときプロレタリアート独裁と言ったとき、プロレタリアートの中身が問題になる。そういう意味では世界最低賃金の上昇なり世界ユニオンと言ったことが最初から提起しなければ現代では無理だと思う。

八木沢 マルチチュードという考え方に対して最初から否定する必要はありませんが、僕は経済的・社会的地位なりポジションの規定は必要だと思う。昔の言葉で言えば「階級規定」が必要で

榎原 では「デモス」と「ピープル」と「プロレタリアート」と「マルチチュード」はどう関連しているのですか？

市田 マルチチュードはそもそもホップスの言っていたことであり、王的権力の側から見たときに「よく分らないやつら」という蔑称として使われた言葉で、規定がないのです。社会的ポジションではなく、いろいろなところに意味があった。誰か分からないけども騒いでいる人たち、この都市国家の住民であるかどうかすら分からない人たち、だけでも危険な勢力として確かに存在している人たちのことです。その言葉を復権するときに一つの転換があり、社会的なカテゴリーに押し込めることができないうところにむしろポジティブな意味を見出そうとした。どこかユートピア的な一面を確かにもつてますが、広い意味での社会学的な規定をはみ出るときには誰もがマルチチュード的にならざるを得ず、単にはみ出るだけではなく、それと同時に別の社会性、他者との別の関係性を構築せざるを得ない。その関係性をマルチチュード＝多性と呼

八木沢 それには反対です。榎原さんのやっている生協運動それ自体に対しては否定していません。マルクスだって消費協同組合よりも生産者協同組合を重要視すべきだと言っていますから、その限りでは否定しません。けれども、そういうことの延長線上に革命があるとは思わない。やはり、分水嶺としての国家権力がそこに立ちふさがるのです。革命とは社会を変えることです。社会革命などマルクス以来当たり前のことです。

市田 では、今日ではどうやって国家権力を取るのですか？ 何をもって「国家権力を奪った」あるいは「これが革命だ」と言うのですか？

八木沢 それはコミュニケーションです。

市田 コミュニオンをつくるのが必ずしも国家権力を打倒することではないんじゃないですか。

八木沢 そこからしか始まらないじゃない？

市田 それなら社会革命的なものが先行するという考え方との違いがなくなる。

表 八木沢さんがいうコミュニケーションとはソヴィエトのことですよ。ね。

八木沢 そうです。そこにおいて現代ではプロレタリアートという概念の中に何が入るのかということは考えなければいけない。

表 昔榎原さんが二・一八プロトの『共産主義』の四号に「労働と所有の分離」について書かれましたが、分離論としては今でも正しいと思いますが、そのときルンペン・プロレタリアートとプロレタリアートを明確に分けていました。しかし現代のプ

んでいると考えてもかまわない。経済学的なものを含む広義の社会学的規定からはみ出ることを、「社会から規定されるのではなく自分たちで主体になること」と捉え返すのです。「主体」とは政治的主体のことであり、いわば統治の全体に参加することであり、そのときには身分、社会のなかでの位置は関係ない。したがって、社会・経済的な身分あるいは国籍、性別などに、叛乱へと向かう本質規定を読み込む立場ではないのです。今日では至る所に見られる「逸脱」の契機を積極的に評価する方がリアリティがあるのではないか、というのが「マルチチュード」の立場です。

榎原 デモスというのはポリスの市民ですよ。

市田 そうですね。ランシエールの話をするようになりますが、ポリスはもともとは有産市民の集まりです。そう想定されている。だから、無産者が現れたとき市民の意味がちよつと変わってしまう。市民という資格を持って共同体の一員として勘定されるけれども、財産はないので勘定されないのと同じ、というような存在が現れたことになりました。これが決定的な転換になる。

今日「フリーター」と言われている非正規雇用者は社会的アイデンティティを持っていないと言ってもよく（何せ「フリー」なんですから）、それなら正規労働者になれば良いのかというと、全員がそうなることは不可能であることははっきりしているし、そうなったところで彼らには面白くも何ともない。「社会の一員でありながら、社会の一員ではない」という境界線におかれている。あるいは自ら止まっている。その境界線上の存在が社会の至る所で立ち現れてくるのがマルチチュード的なのが目に見える

るときではないですかね。

表 中世の都市で言えば、「無産者」は都市の壁の「外」にいる人たちですよ。しかしマルクスのもので読んでみると工場労働者として見るので「中」にいる人と考えてしまう。そのことがプロレタリアートの中身を考えなければならぬことにつながる。現代のようにホームレスがこれだけ出てきて、格差がこれほどまじり込んでいる状況の中で「最底辺」をどう組み込むかということが問題になる。

榎原 彼らの行う運動は伝統的な労働者階級の組合運動とは違うものです。七〇年の闘争をがんばった人たちでも結構釜ヶ崎などの寄せ場の運動をやっている人たちがいますが、そこにおける運動は一般的な労働運動とは全然違う。そのことも含めた上で、現代の貧困若年層の運動はどうなのかということは、労働運動とかプロレタリアート独裁とか労働者党とは全然違う発想で考えなければ、そもそも分からないと思います。

八木沢 運動はそのような現在のグローバル資本の矛盾が出てくるのかというところからしか位置づけられない。

市田 そのときに運動の軸として「働き口を与える」にするのですか？

八木沢 労働組合的な側面ではそういうものもあります。今の労働の規制緩和に対して制度的要求として出すことは現実的にやらなければいけないものとしてある。

市田 マルチチュード路線の中で言われていることは、働き口を与えるというのではなく、所得収入保証、ベーシックインカムで

す。言ってみれば、日本の生活保障制度のようなものを一般化するということ。

榎原 存在するだけで生存の価値を与えようということですね。そんなこと実現したら僕は嬉しいけどな(笑)。だけど、僕はそんな運動はやらないな。

表 けども、永久方針ではなく、このような状況では過渡的に重要な要求になる。

市田 社会運動としてはアウトノミア系の運動の中でスローガンとして掲げられたものです。雇用を求めるのではなく、生存を求めるといいます。でもそもそも、こういう情勢であるからこういう運動をすべきだ、と組織的に言っていくところが必要なんでしょうかね？

榎原 そういうことを言っても誰もやらない。

市田 そう思います。ますます党的機関の意味はなくなっている。党的なものが必要があるとしたら、至る所で自然発生的にいろいろなことが勃発することに対して、早くそれらを発見し分析する役割です。一九〇五年のときにトロツキーはメンシエヴィキでさえなく、たった一人だった。たった二人の「党」だった。だからこそレーニンは一九一七年にトロツキーを自分たちに組み込もうとしたのではないか。

市田 現代では指導的存在としての党なんか考える必要はまるでないと思う。情勢認識についても、これだけ教育も行き渡り、インターネットと言われている人も無数にいるのだから、何らかの「認識」が次から次に出てきますよ。放っておいても、それを受けて行動

する人は出てくる。ネグリが本を出すだけで影響を受ける人がたくさんいるわけですよ。「プレカリアート」という言葉も放っておいても広がった。本当に正しい方針であるならば、誰かが書くだけでそれは広まる。『帝国』(以文社)や『マルチチュード』(NHKブックス)があれだけ売れるというのは、売れるだけの地盤、客観性があったからでしょ。

八木沢 それはそうです。しかし、悪い影響を与えている(笑)。

市田 悪い影響ということなら、レーニン主義の方が問題です。

八木沢 それはレーニンに対する誤解に基づいているのです(笑)。

表 一方でどうしようもなく遅れたロシアが近代化を遂げる流れにレーニンが乗らざるを得なかったということもあります。

八木沢 レーニンはロシアの野蛮性について何度も触れています。でも、ロシア革命は帝国主義戦争の惨禍から起きたのだから、そこから始めるしかないと言っている。レーニンには二通りのリアリティがある。

市田 しかし、当時の状況と今とは違いますよね。

八木沢 違う側面もあるし、南の国々では共通するところがあります。そういうことならば、党的なものを日本で作る必要はなく、南に行つてつくれば良い。

八木沢 全体をまとめる力はどういう状況であっても必要です。だからある段階を経て党は道具に過ぎない。

現在いろいろところで叛乱が起こりつつある。運動が分散

的・個別的になつてきているのは、それぞれの問題が今のグローバル資本主義から発している側面と、新自由主義の中の民営化等々による労働組合の敗北、そしてそれに伴う結果でもある側面がある。日本ならば総評―社会党というラインがあり、フランスならばCCF(労働総同盟)―フランス共産党というラインがある中で全人民的政治闘争があった。そういうものが敗北して、それぞれの運動が分散化してシングルイシューの運動になってしまった。それはネグリの言っているような、新しい資本主義によって規定されている。しかし、それらはいずれ全体的な闘争になっていくのだから、ならなければならないと思う。

8

市田 今日でも「蜂起」とか「蜂起を準備する党」という概念は有効だと思いますか？ 「蜂起」とはどこでどういうことをすることなんですか？

八木沢 党が何十万人かによって構成されているなら、その周りには何百、何千万の人民があり、その何千万かの人民が政治過程に引き込まれない限り革命は起こりませんよ。だからこそ革命というわけじゃないですか。

市田 そのような社会変動あるいは蜂起は起こり得ると思いますし、準備できるものなら良いと思う。しかし、東ドイツの社会主義の崩壊は準備されていたものだと思いますか？

八木沢 準備されていませんよ。

市田 「準備」や「蜂起」という一言に込められているものが、今やほとんど意味をなさないほど拡散してしまっている。だからその言葉を使って何か意味があるのか。

八木沢 レーニンなら帝国主義戦争、マルクスならば恐慌でしょうが、要するに何千万の人民が政治に登場してくるような「危機」ですが、それが何によって起こるかには誰も分かりませんよ。

市田 では、「準備」とはどういうことですか？

八木沢 そういう「危機」が起こらなかつたら、古典的な意味での革命は起こらないですよ。もしこれを否定するならば、構造改革しかないということになってしまおう。

表 フーコーが言ったことは、プロレタリアートが革命をし、それを党が準備するという考え方は、プロレタリアート一元主義になって他の闘争を抑圧することになると言うことを言っている。そのことを言わないと、こうした議論は展開しないと思う。

榎原 ロシアも中国も戦争の中から権力を取り、キューバも内戦をやっている。僕らがなぜ武装闘争をやらなければならなかつたのか考えると、何とかしようと思つたら、そうしたことを引き継がざるを得なかつたからです。階級闘争は終わったところから始まるというテーゼがあります。今引き継いだら、それは自爆テロになってしまおう。自爆テロを積み重ねて一つの陣形をつくると考える方が現代ではリアルです。

八木沢 それは違う。キューバで革命が起こつたのは、アメリカの植民地支配とそれと結託した支配者たちに対する人民全体の怒りがあつたからです。人々の大多数の怒りが無い限り革命なんて

起こらない。

榎原 自爆テロをする人にも怒りはあります。

八木沢 もちろんそうです。抑圧され、貧困に追い込まれているという猛烈な意識があるからです。

榎原 そういうエネルギーが伝統的な大衆運動では回収し切れずにあのような形になっていることをどう評価するのかということですか。

八木沢 革命は一定の条件がなければ起こらないのであり、それが帝国主義戦争であるかもしれないし、恐慌かもしれないし、政治腐敗かもしれない。必ずしも恐慌にこだわらなくても良い。しかし、そういうことを予言することはできない。だけでも、何らかの「危機」を前提としない限り革命はない。革命は大衆自身が行うものです。

表 八木沢さんも実際に運動が目の前で起こつたら、じつとはしてないですよ。

八木沢 だからばちばちやっています(笑)。後衛で。

市田 それはダメだ。今でもレーニンが有効なら断固としてレーニンの党をつくり、自分がやらないなら誰かにやらせなければいけない。

八木沢 正論ではその通りですよ。

市田 「レーニンの復権を」と言うなら、即レーニンを建設運動すべきです。兵士の組織化というなら、自衛隊にオルグに行くべきだ。

八木沢 単ゲバですよ。

表 榎原さんの『A S S B (Alternative Systems Study Bulletin)』誌は党だと思ふ。一人で党をやっている。何かを発信しているということでは党です。

榎原 誰も聞いてくれませんが(笑)。

市田 「党」という言葉を使うか使わないのかという問題なのかもしれません。しかし、そのときの自身は「何をしろ」という指導ではなく、どこそこで何かが起こっている、ではどのように支援するのか、ということにつきるでしょう。

榎原 起こつたことに対する論評です。レーニンも全部そうです。戦争が起こつたら、「これは帝国主義戦争だ」と論評する。

表 しかし、実際何が起こって、ではどうするのかということになれば、大論争が起こりますよ。それを覚悟しなければならぬ。だけでも、共産主義者とはそういうものです。

とところで、現代こそ「戦争を内乱へ」の時代だと思いませんか。市田 スローガンを掲げなくても、すでに内乱になっているのではないですか。

市田 そうですよ。その昔に遠方派からいただいた「肉体派プランキスト」という称号は今でも気に入っています。自分の選択肢としてどのようなものがあるのかというところからしか話は始まらない。「レーニン主義の復権」を唱えるならば、レーニンの建設に邁進すべきだし、全国政治新聞をつくつたらいい。フロイトなどを持ち出して現代思想的な粉飾をこらしてまでしてレーニンを復権する必要は全然ないと思う。本当に復権したいなら素直にやれば良い。

八木沢 それは同意見です(笑)。

市田 八木沢さんは、レーニン主義にあくまでもこだわられるなら、レーニン主義の今日的な形態とは何か？ 何をなすべきかを言ってくれなければ困ります。

八木沢 私などがそんなことを言うのはおこがましい。

市田 レーニンには「おこがましい」なんていう言葉はないですよ、お前らが民主的に統治しているより、オレが独裁した方が良いなんて言う人間ですから。

表 もし党的なものを考えるならば、いきなり世界党でしょうね。

八木沢 コミンテルンも党ですからね。

表 コミンテルンは当時のナショナリズムの中でできたものであって、今は世界党しかない。

榎原 世界党になるべきところには何もなくて、真空で良いと思う。何もなくて理念を共有しているだけで良いと思う。

市田 「共産主義者の世界的連帯」だけで良いんじゃないですか。

八木沢 それで良いと思う。

(二〇〇八年二月七日京都にて)